

第3期飯塚市地域福祉計画策定に係る 関係団体ヒアリング調査報告書

2022年9月

目次

1. 調査概要	1
2. 調査結果	2
(1) 事前調査結果概要	2
(2) グループインタビュー	7
■NPO法人地域ネットワークサポート九州	7
■かいた子育てサポートジャム	7
■飯塚市居宅介護支援事業者連絡協議会	9
■グリーンコープ生協ふくおか筑豊支部委員会	10
■飯塚市ボランティア連絡協議会	11
■飯塚市自治会連合会	11
■飯塚市婦人会	12
■飯塚市民生委員・児童委員協議会	14
■NPO法人人権ネットいづか	15
■飯塚市老人クラブ連合会	15
■筑豊子育てネットワーク「かてて」	16
■いづか男女共同参画推進ネットワーク	17
■飯塚市・嘉麻市・桂川町障がい者基幹相談支援センター	17
■ぽれぽれの会（障がいを考える会）	18
■NPO法人いづか障害児者団体協議会	19
■中央福岡ヤクルト販売（株）東筑支社	21
■NPO法人飯塚市青少年健全育成会連絡協議会	21

1. 調査概要

■調査目的

第3期飯塚市地域福祉計画策定にあたり、地域で活動している団体、地域福祉に協力している企業等から地域福祉における課題を把握するため。

■調査対象団体

- ・ 飯塚市ボランティア連絡協議会
- ・ 飯塚市・嘉麻市・桂川町障がい者基幹相談支援センター
- ・ 飯塚市民生委員・児童委員協議会
- ・ 飯塚市自治会連合会
- ・ 飯塚市老人クラブ連合会
- ・ いいづか男女共同参画推進ネットワーク
- ・ 飯塚市居宅介護支援事業者連絡協議会
- ・ NPO 法人地域ネットワークサポート福岡
- ・ NPO 法人飯塚市青少年健全育成会連絡協議会
- ・ NPO 法人いいづか障害児者団体協議会
- ・ ぽれぽれの会（障がいを考える会）
- ・ 筑豊子育てネットワーク「かてて」
- ・ 中央福岡ヤクルト販売（株）東筑支社
- ・ グリーンコープ生協ふくおか筑豊支部委員会
- ・ かいた子育てサポートジャム
- ・ NPO 法人人権ネットいいづか

■調査方法

記述式による事前調査に基づいて、対面式のグループインタビューを行った。ヒアリング調査は、調査票への記述式の回答方法。なお、グループインタビューについては、スケジュールの都合の合わなかった団体に対しては、個別ヒアリング、電話によるヒアリングを行った。

■調査項目

各分野における現状・課題。地域共生社会を構築するために必要なこと、等。

■調査期間

事前調査：2022年6月

ヒアリング調査：2022年9月5日、7日、8日

2. 調査結果

(1) 事前調査結果概要

■質問内容

- ① 現行計画における基本目標毎の事業の実施状況、課題や今後の取り組み
- ② 活動内容に変化があったかどうか
- ③ どのようにしたら地域での活動がしやすくなるか

①現行計画における基本目標毎の事業の実施状況、課題や今後の取り組み

【基本目標1】お互いを大切にしようひとりづくり（抜粋）

<課題や今後の取り組み>

◆かいた子育てサポートジャム

- ・ コロナ禍で2年間、会員が集まって学べる場もできず、新しいメンバーの声かけもできなかった。

◆ぽれぽれの会（障がいを考える会）

- ・ コロナで学校にいけない。親も50代をすぎ介護。

◆飯塚市・嘉麻市・桂川町障がい者基幹相談支援センター

- ・ 高校の教諭向けの研修開催はあるが、小中学校の生徒や教員向けの障がい者の理解や差別解消に向けての講演会や、体験、研修等の取り組みが必要。障がい者、マイノリティな方々の生活などに地域住民の方々に関心や正しい知識を持って頂くこと。

◆飯塚市居宅介護支援事業者連絡協議会

- ・ 地域との交流・関りの機会をつくる。

◆いいつか男女共同参画推進ネットワーク

- ・ 市民への広め方。
- ・ 担当課との意識・考えの違いから生ずる事業運営の難しさ。

◆飯塚市ボランティア連絡協議会

- ・ 人材の育成。

◆飯塚市自治会連合会

- ・ 自治会加入率が減少傾向にあるため、自治会、飯塚市と協働にて自治会加入促進活動を推進する必要がある。

◆飯塚市老人クラブ連合会

- ・ 住み慣れた地域、身近に支え合え、交流できる仲間を広げることが必要。そのために老人クラブ会員を拡大増強していくことが課題となっている。

◆飯塚市婦人会

- ・ 課題としては、実働している会員に偏りがみられている。このような状況だと今後の活動で会員の負担増にもなるため新たな会員拡大を図る必要がある。今後も人権や福祉に関する啓発活動を継続していく。

◆NPO 法人飯塚市青少年健全育成会連絡協議会

- ・ (各地区の非行防止キャラバン活動について) あいさつや声かけを通した非行防止を呼び掛ける活動ではあるが、全地域への広がりまでには至っていない。

【基本目標2】支え合う地域づくり

<課題や今後の取り組み>

◆筑豊子育てネットワーク「かてて」

- ・ 虐待防止につながるような支援のあり方。就学児のきょうだいのいる家庭への支援（現状ではセンターを利用できるのは未就学児だけのため、小学生は入室できず、きょうだい児がいる親子が利用できない）

◆NPO法人地域ネットワークサポート福岡

- ・ 新型コロナウイルス感染症の流行により、積み上げてきた活動が停滞してしまい、運営にあたっての経済的な危機を抱えています。大学生の行事参加もなくなりました。

◆飯塚市・嘉麻市・桂川町障がい者基幹相談支援センター

- ・ 当事者、家族など第2当事者の声を拾う作業。福祉支援者、専門職ではない、民生委員、自治会長等地域の最前線で活動されている方々とのコラボレーション。
- ・ 発災時に向けた避難の準備をどのように進めていくか、計画していくかの取り組み。障がい者支援分野ではサービス等の一環として義務化はされていないため…どの程度の協力が得られるか。要援護者台帳等の活用。

◆NPO法人いいづか障害児者団体協議会

- ・ 呼びかけが限定的。困りごとが多様化していて対応がむずかしい。

◆飯塚市居宅介護支援事業者連絡協議会

- ・ 高齢者以外の方との関りの強化。

◆飯塚市老人クラブ連合会

- ・ 高齢者の増大による見守り対象者の増加、支援者の高齢化に伴いカバーできなくなっている。またコロナ禍のため訪問活動が制限されてしまう。民生委員や福祉委員等との連携協力がより重要

になる。

◆NPO法人人権ネットいづか

- ・ まちづくり条例を衆知し、その精神を生かし住民のつながりを強めることが大切。自治会のみが大きな存在になっている。今のまちづくりの取り組みをもう少し柔軟なものにかえることが大切。

◆飯塚市婦人会

- ・ 課題としては、実働している会員に偏りがみられている。このような状況だと今後の活動で会員の負担増にもなるため、新たな会員拡大を図る必要がある。

【基本目標3】つながるしくみづくり

<課題や今後の取り組み>

◆筑豊子育てネットワーク「かてて」

- ・ 関係機関につなげてみたものの、的確なアドバイスや対応をしてもらえない場合があり、こちらの認識不足なのか、相談窓口の力量不足なのか迷う時がある。ワンストップで対応してくれる窓口を行政に作ってほしい。

◆飯塚市・嘉麻市・桂川町障がい者基幹相談支援センター

- ・ 行政機関の超縦割り（飯塚市>嘉麻市>桂川町）による弊害（相談先の難解さや効率性の悪さ、無駄や回答性の時間的ロスなど）の改善への取り組み。総合相談（トリアージ的機能を含む）窓口の開設。虐待、ハラスメントの理解や周知、その事への行政機関との対応や協働の難しさ。

◆飯塚市老人クラブ連合会

- ・ 困りごとの内容を把握し、適切な関係機関による支援への「つなぎ役」として情報の収集や研修をつむことが必要になる。

◆NPO法人人権ネットいづか

- ・ まちづくりとの連携をより強めることが課題

② 活動にどのような変化があったか。

◆飯塚市・嘉麻市・桂川町障がい者基幹相談支援センター

- ・ 職員の増員はありがたいものの、虐待防止電話、緊急ケース対応の24時間受付電話の受付、困難ケース、障がい者虐待事案の増加などメンタル的負担は増加の一途であり、「障がい者」周辺者への対応も増加中。

◆いづか男女共同参画推進ネットワーク

- ・ ネットワークであるため、それぞれの団体の構成人数の増減により、5年前に比べて会員数は減少している。しかし、毎月の役員会、常任理事会で意見交換などを丁寧に行っているため、活動内容自体は変わらない。むしろ、コロナ禍ではあるが、積極的に参画し情報発信していると思う。

◆飯塚市自治会連合会

- ・自治会加入率の減少。それに伴い積極的な自治会加入促進の推進を行っている。また、自治会役員等の担い手不足により自治会活動を続けることが困難となった自治会の自治会休止・廃止が増加している。

◆飯塚市老人クラブ連合会

- ・会員の増減、活動内容の変化、新規に取り組んだもの、取り組みをやめたものなど老人クラブの組織は平成28年の100クラブ、会員3,839人から令和4年現在89クラブ、会員2,830人と大きく減少するとともに、会員の高齢者化が進み、活動の担い手が少なくなっている。

◆飯塚市民生委員・児童委員協議会

- ・コロナ禍による見守りの変化（訪問ではなく、電話での聞き取りや手紙の投函など）。見守り対象の拡大（高齢者のみではなく、子どもや子育て世帯を含めた見守り）。

③ どのようにしたら地域での活動がしやすくなるか

◆かいた子育てサポートジャム

- ・親子の出会いや交流を大切にしながら、安心し、自信を持って子育てできる環境をつくり、人と人、人と地域をつなぐ、同じ地域で子育てをする先輩、仲間としてサポートすること。

◆筑豊子育てネットワーク「かてて」

- ・行政の惜しみない協力があれば、活動しやすくなると思う。年に一回程度で良いので、スーパーバイザーのような人を配置して交通整理しながら、行政や団体と振り返りをする場を設けたら良いと思う。（ねらいや目的がしっかり見えてくると思う）

◆飯塚市・嘉麻市・桂川町障がい者基幹相談支援センター

- ・職員の増員もありますが、フォーマル、インフォーマルな社会資源のコラボ、共助体制の構築に向けた取り組みなど。引きこもり相談や、精神科未受診者（精神科受診が客観的に必要と認められるケース）への対応の相談に対して、どちらも専門性を求められるため、対応チームや対応システムの構築が必要。

◆NPO法人いづか障害児者団体協議会

- ・障がい者への理解は、良い方向に進んでいると思う。今後スマホなど更にITの進化などで、コミュニケーションがとりやすくなればと思うし、在宅ワークの広がりや、就労などへの取りくみややすさにつながっていくように思います。

◆いづか男女共同参画推進ネットワーク

- ・「協働」とは、市民と行政がいっしょに活動することだと思う。お互いの得手不得手を補い合いながら進めていくのがベストなのに、いつの間にか行政がイニシアティブを取ろうとしたり、市民の力を信用していないと思われたりする場面が時々見受けられる。「協働」は、お互いを信用していないと進まないことから、もっと市民の力を信頼して任せてほしい。俯瞰した視点から軌

道修正することは、もちろん必要だが、一緒に活動していて、「なぜやるのか？」という目的が見失われ、「きちんとやり遂げる」という目的にすり替わっている部分がある。市民の力を信頼して、市民が動きやすいようにサポートしてほしい。

◆飯塚市自治会連合会

- ・自治会加入促進を行い、地域活動についての広報を積極的に行うこと。また、ひとりひとりが地域活動に対しての意識を持つことが重要だと考える。

◆飯塚市老人クラブ連合会

- ・会員増強の一層の推進。会員に一人ひとりによる知人友人など未加入者の加入呼びかけ。老人クラブ活動の魅力や有用性の発信が大切になる。また、地域活動の中心である自治会との協力がより重要になってくる。

(2) グループインタビュー

<グループ1>

調査対象：かいた子育てサポートジャム、NPO法人地域ネットワークサポート九州

調査日時：9月5日（月） 10時00分～11時00分

調査方法：対面式のグループヒアリング

■NPO法人地域ネットワークサポート九州

【現状】

- ・ 商店街の中で多世代が交流できる場を設けた。自主運営ができそうになったところで、コロナがやってきた。
- ・ なんの縛りのない場を設けたので、いろんな人が話にやってきている。話をして、気分を晴らして帰る人も多い。

【共生社会に必要なこと】

- ・ 相談できる場所があることは重要だが、相談に行こうという気持ちになることがそもそも大事だ。深刻な問題だと相談することも困難になる。そうした人へどのように手を伸ばすか。行動してもらえるような仕掛けが必要なのではないか。
- ・ 本当に深刻な問題を抱えている人に、どうやって情報を届け、気持ちを変え、行動を促すか。行動までつながれば、解決に結び付くが、それが困難だと思う。
- ・ 我々が対処できるのはそこまで深刻な問題を抱えていない人になる。問題が深刻な人をどうするかが重要だと感じる。
- ・ そうした人を助けるためには、情報が必要だ。また、そうした人に情報を届ける必要もある。

■かいた子育てサポートジャム

【子育ての現状】

- ・ コロナによってお母さんたち同士が出会う場がなくなったことが大きい。どうしても話したいことだったり、相談したいことだったり、ちょっとした言葉でも話す場がなくなってしまった。その状況への対応として、気軽に遊びにこられる場をつくった。
- ・ コロナはデメリットではなかったと感じる。コロナ前までは、多くの人が出てきて達成感を感じていたが、やってきた人たちとしっかり関わっていたかどうかと思う。時間制限、人数制限されるなか、その人たちの話を聞き、関わることができ、また繋げられたという実感が得られている。
- ・ お母さんたちのほうでも、“時間だから帰るように子どもに言える”と聞いたことがある。そうした意味では、自分たちにも気づきがあった。
- ・ 振り返ってみると、人と人とのつながりは大切なんだと感じている。旧穎田町のなかで、穎田病院やネットワークのなかでつながってる先生が、子育て支援センターに来てくれたりして、地域の中で支え合いながらやっている感じがしている。

【共生社会に必要なこと】

- ・ 本当に何か一歩踏み出してもらえる人に本当は一番声をかけたいところだが、そこが難しい。我々のなかでも常に問題になっている。
- ・ 子育て支援センターは行政とのつながりがあるので、そうした人への声かけなどを行っている。また、一歩踏み出してもらえるよう、アプローチを行っている。
- ・ SNS等を活用して、情報を広めている。以前はお母さんたちの口コミで広がっていたが、コロナでそれがなくなってしまった。そのため、SNS等をうまく活用して情報を発信することが必要だと考える。われわれの年間事業を、公の場であったり、地域の食堂であったり、できるだけ多くの目に届くようには試みている。

【今後の取り組み】

- ・ 我々は子育てに関して自主的に集まり、自分たちがやれることをしようとし、地域の子どもたちは、うちの子もよその子も同じように見て、さらに自分たちがサポートする側に立つということをやってきた。これが今まで通りやっていければよいと思う。
- ・ みんなで何か学び合いながら、それぞれが子育てをする中で、子どもたちの成長とともに自分たちも成長して地域を活性化できればいいと考えている。

<グループ2>

調査対象：

飯塚市居宅介護支援事業者連絡協議会

グリーンコープ生協ふくおか筑豊支部委員会

飯塚市ボランティア連絡協議会

飯塚市自治会連合会

調査日時：9月5日（月） 14時00分～15時30分

調査方法：対面式のグループヒアリング

■飯塚市居宅介護支援事業者連絡協議会

【現状】

- ・ 飯塚市は高齢化が進んでいる。その中でも問題となっているのが8050問題だ。80歳代の親と50歳代の障がいを持った子どもとの二人暮らしという家庭も増えてきている。ケアマネジャーは、介護保険という制度の中で高齢者に向けての支援を行っているが、障がいということとなると支援できないところになる。その点は、専門職と連携をとっていかないと住民を支えることが難しくなっていると感じている。
- ・ 飯塚市全体として頑張っているのは、医療と介護の連携だ。飯塚市では、在宅医療に力を入れている。その一翼を担えたらということで、協力しているところだ。
- ・ 医療介護連携推進事業を進めていく中で、医師、他の職種の人と連携がしやすくなっている。医師もわれわれの意見を聞いてくれ、他の職種の方も相談すると、いろいろと助言を返してくれる。地域的には進んでいる地域なのではないかと思っている。
- ・ 障がい支援をされている相談支援者と密に連携を取っており、地域包括支援センターとは連絡は取れている。

【課題】

- ・ 困っている人のところに行き、話を聞くということができなくなっている。ただ待っているだけでは情報が入ってこないのので、民生委員、地域包括支援センター等と連携していく必要はある。しかし、個人情報の問題で、情報を獲得できないことがある。
- ・ 介護予防を重点的にやっけていこうとしている。そのなかで課題となっているのは、要介護度の軽い方が通える場所がないということだ。重度にならないように予防するためには、気軽に交流できる空間がもっと必要ではないかと思う。そうした場をつくると、そうしたところで活躍できるボランティア団体も増えてくるのではないか。
- ・ 飯塚市では、要介護1の軽いレベル人が多くなっている。他のレベルは他の市町村に比べて低かったり、維持されている。そうした点からいうと、フレイルへの対策ができていないのではないかと感じる。
- ・ 交流センターも建て替わって、綺麗なところもできている。コロナが収束すれば、そこに集まりやすくなるのではないか。環境としては整えられていると思う。
- ・ 現在他団体と連携しているのが、各職能団体が中心となっている。しかし、そこに属さない人たち、実際に現場で介護を行っている人たちとの連携はなされていないと思う。介護福祉士会などに入っている人に関しては、おそらく情報が行くようになっていっていると思われるが、実際はそうし

た会に入っていない人が数多く働いているのではないかと思う。そうした人たちに、介護と医療が連携しているといったことを、情報として伝える必要があるのではないかと思う。

【連携を進めるためには】

- ・ 医療介護が中心となるのだが、飯塚市では地域包括ケア推進室が医師会のなかに設けられており、そこが中心となっていていろんな職種の人たちに声をかけて、広めている。取り組みが始まって6年くらいになると思うが、いろんな団体が参加するようになっている。ある程度力のある組織が音頭を採るとスムーズになるのではないか。

■グリーンコープ生協ふくおか筑豊支部委員会

【現状】

- ・ 本生協の福祉委員のなかで話題となったのが、引きこもりのことだ。飯塚にも数多く引きこもりがいる。民生委員では対処ができないと聞いている。本生協の組合員であれば、私たちが動くことができる。
- ・ 見守り等おこなっており、組織化されているぶんだけ、早期に対応できるのではないかと考えている。
- ・ 組合員であれば、引きこもりの相談を受けた場合、就労支援を行っている担当の者が話を聞きに行くということになる。
- ・ 他団体と連携しているので、地域のなかのいろんな情報は入ってくる。

【今後について】

- ・ 今後は買い物支援ということが増えると思っている。自分から買い物に出向くのではなく、われわれがモノを持っていく。グリーンコープの中には、見守り宅配というものがあり、冷蔵庫までもっていけない人への支援もしている。また、口がきけない人に向けて、手話での支援も行っている。
- ・ 買い物の場はコミュニケーションの場であると考えている。また、福祉というのは、その人のことが心配になったときから始まると自分では思っている。

■飯塚市ボランティア連絡協議会

【現状】

- ・ 連絡協議会なので、各地区の各団体がどのような課題を持っているかは把握できていないが、話を聞いていると、高齢化が進み、次の担い手がないということはあるようだ。
- ・ ボランティアがいろいろと声掛けはしているみたいだが、子育て中であつたり、仕事をしているということで、新しく入ってくるというのは難しい状況にあるようだ。
- ・ さわやかスポーツ大会において、高校生がボランティアとして参加している。その後も卒業してからお手伝いとして参加する人もいるので、若い人すべてが興味を持っていないかというところでもない。
- ・ 構成する個々の団体は、行政とつながっているので困りごとなどは聞かれていると思う。

【今後の活動】

- ・ コロナでいろんなイベントができなくなった。ボランティアを行う団体は、そうした事業がないかぎり、活動が成り立たない。それができる状況になることが大事かと思う。
- ・ 高齢化し、人材の募集、育成を行うためにも、活動を広げるためにも、そうした活動が必要だ。地域で連携していけば、うまくPRもできるのではないか。
- ・ 先ほど言われたようにちょっと施設もすごく新しくなつて、利用もしやすくなつたりしている。いろんなその子育てに関する施設とかも、新しくなつたり、環境は整つてるので、あとはその環境を上手く活用できるようにしていく必要がある。

■飯塚市自治会連合会

【自治会の役割】

- ・ 自治会は減少している。また、成り手も不足しており、自治会を廃止したりということが起きている。自治会長の仕事の負担が負担となっているということが理由として挙げられている。それに対する具体的な案はでていない。一つ上げるとするなら、市報の配布を民間にいたくするなどのことが考えられる。
- ・ 自治会に入っているメリットが少ないという声はある。会費を払った分のメリットがないといわれる。
- ・ できる範囲で地域の活動を行っている。
- ・ 相談支援、地域の困りごとを自治会長が拾って、それを市に伝えることが役割かと思う。そうした相談支援が継続できればと考えている。

<グループ2>

調査対象：飯塚市民生委員・児童委員協議会
NPO法人人権ネットいづか
飯塚市婦人会
飯塚市老人クラブ連合会

筑豊子育てネットワーク「かてて」
いづか男女共同参画推進ネットワーク
飯塚市・嘉麻市・桂川町障がい者基幹相談支援センター
ぼれぼれの会（障がいを考える会）

調査日時：9月7日（水） 14時00分～15時30分

調査方法：対面式のグループヒアリング

■飯塚市婦人会

- ・ 活動内容が年間15種目ぐらいある。
- ・ コロナ禍で職がなかったり収入がなく、食べ物がなかったり生活困窮している家庭が多い。そういった家庭に十分な食料を与えるため、子ども食堂や無料食料配布といった活動に力をいれている。
- ・ 生活環境が変わったので見た目だけではわからない。命を繋ぐ食というのを、一番大事にしないといけない。
- ・ 食料を集める活動範囲が広いため、地域ごとに自治会に協力してもらえたら助かるなという思いはある。
- ・ 支援を十分にできるように調達したり、企業や団体も協力してくれているが、まだまだ十分とは言えないので、やはり地域と繋がって、本当に困ってる方たちが見えるようにするのは大事だと思う。
- ・ 子ども食堂は、子育て支援課、生活支援課、技術支援課と共同で、5年前から始めた。子どもに重点的に力を入れ、子ども食堂、無料食材配布を続けている。5年間で軌道に乗っているが、一方では会員の担い手、会員を増やしていかないといけないという課題がある。
- ・ 高齢の会員が増えており、60代70代の方がやっていかないといけない。男女共同参画でも呼びかけをしている。
- ・ 食材運びにも力があるため団塊世代の男性に今頑張ってもらっている。

【会員減少・高齢化に対して工夫していること】

- ・ 定年退職して家にいる男性を引っ張り出すため、会員さんのご主人も入れている。そこからご主人の友達などにも会員になってもらっている。
- ・ 本当は若い人に入ってもらいたいが、どんな活動しているのか伝わっていない。総会をはじめ、色々活動があるが、一年間どんな活動しているのかと思われている。
- ・ 合併してから男性数は少なくなっている。コロナで誰でも入ってとは言いつらくなっている。
- ・ 40代50代の男性がボランティアで参加してくれるようになった。委員会のホームページ見ましたとか、若いお母さんがホームページ見ましたなどと電話がかかってくる。子育ても大変なので

強制はしていないが、ボランティアの方が加勢してくれるので助かっている。

- ・ 情報発信として、チラシ作成やホームページを掲載している。子育てが大事なので強制はしていないが、出てきてほしいと思う。

【地域の連携体制の現状】

- ・ 市のホームページに載せたり、婦人会のホームページにも載せている。
- ・ 子ども食堂はたくさん応募がくる。食料に限りもあるので、多い時は断ることもある。
- ・ 情報は、各団体との連携が大事。障害サポートセンターの方がボランティアで毎月2～3人応援に来てくれる。障がい者だろうが、健常者だろうが、色んな団体が連携して子ども食堂を応援してくれている。
- ・ 婦人会の人数は減ったけど、他社からの連携は増えている。ネットで見ている。
- ・ 子ども食堂を開いたときに当時応募少なかったので、チラシをつくり自治会の折り込みに入れてもらったが、それでも応募が少なかった。若い人が自治会に入っていないのが原因であった。
- ・ 年会費が高く、余裕がないので入らない。金額を下げれば入るのでは？

【飯塚市全体として必要なこと（相談支援・参加支援・地域作りに向けた支援）】

- ・ 自分の趣味の活動に重きを置く人も多く、婦人会、サークルなども入らない。会員にならなくてもボランティアに来てもらえるような体制支援してもらえたらいいのではないかな。

■飯塚市民生委員・児童委員協議会

【現状】

- ・ 民生委員の本当の目的は、社会福祉の増進を図ることだが、非常に範囲が広い。
- ・ 主に活動しているのは、高齢者の方に健全でいきいきとして生活をしてもらうこと、子どもたちがしっかり成長していくことだ。
- ・ 手助けができないか、身体障がい者の方に何か我々が手助けすることはないかを柱として大きくやっている。
- ・ コロナで難しい面もあるが、高齢者の方（75歳以上）で一人暮らしの方に月1回訪問して、話を聞いて悩みを聞いたり、相談に乗ったり、何か手助けできることはやっぴいこうと取り組んでいる。
- ・ 子どもたちには、今はコロナ禍だが、防犯面ということで朝の挨拶運動や、以前は学校開放日があり、必ず出席をしていた。終了後に学校の先生と今の状況や今後の方針などを聞きながら、その中で我々が何か手助けしたいと考えている。イベントがある場合には参加して、しっかりとした大人になっていくように手助けする活動をしている。コロナ禍で学校がなかなか受け入れてくれないので中断しているが、従来は学校と連携ができていた。
- ・ 身体障がい者の方には、施設が3ヶ所あり、イベントに参加して、話をしたり食事をしたり状況などを聞いている。施設の中でも外に出て作業をして頑張っている方に声かけや、交流して何かできないかとやっている。
- ・ 現在、コロナで学校や施設が受け入れてくれないが、状況は園長などと交流があると聞いているが、実際に中に入っぴいの活動が難しくなっている。
- ・ コロナで活動自体が少なくなっているので心配している。制限されている中でできる活動をしている。
- ・ 一番は子どもたちの成長、学校との関りを持っていきたい。挨拶運動とか見回り活動など外の防犯面ではやっぴいしているが、学校の中に入れない。

【課題】

- ・ 高齢者の中にもいろいろな人がいて、人とよく折衝をされる方、孤立して一人の方もいる。また、車もないので、いろいろなことを民生委員にお願いされることもある。常態的になっぴいらいけないので、お断りしている。
- ・ 金銭問題もある。親しくても、金銭関係はやめてくれと言っている。
- ・ 色んな人がいるので、きちんと一人ひとり対応していくのは難しい。
- ・ 自治会との連携は、うまくいっぴいしているところとそうでないところ両方ある。うまくいっぴいしているところは、自治会の役員がしっかりとっぴいして情報共有ができていっぴい。逆に、お互いに支え合いながらという趣旨に欠ける人もいっぴいるので、そこは問題である。
- ・ 自治会加入率についても、若い人は入らない、関わらないという人も多い。
- ・ どこに原因があるとか、どうしたらいいのかわっぴいいう解決策がない。
- ・ トップになる人がやる気があっぴいて、真剣に考えてくれる役員さんがいっぴいれば、その自治会は変わっぴいてくると思う。
- ・ 自治会と民生委員の連携、お互いに意思疎通を図りながら情報共有。

【飯塚市全体として必要なこと（相談支援・参加支援・地域作りに向けた支援）】

- ・ 入っぴいからの気づきもあるので、まずは参加してもらいっぴいたい。

■NPO法人人権ネットいづか

【現状】

- ・市の委託を受けて人権問題の啓発を行っている。市全体の講演会、地域の講演会をしている。各自治会の個別の講習会に力をいれている。
- ・自治会が成り立たない地域での開拓必要だが、隣どうしのつながりが少なく、自治会自体の問題点もある。まちづくり条例ができているが、まさに、趣旨は同じである。
- ・相談事業を一年に1～2回することによって、顔見知りになったり、地域の問題が分かったりする。

【課題】

- ・自治会といえば、地元の高齢者が運営しているというイメージがあり、若い人や女性役員は少ない。まちづくり条例にもあるので、それを改善して、誰でもお互いのために入っていきえるようにするため、どのようにやっていったらよいか。
- ・地域が連携するためのつながり、既定の組織にとらわれない、そういったものがあるのではないか。
- ・相談事業で地域の悩みを聞くこともある。ネットを使う若い人たちは現地に顔を出す暇がない、チャンスがないのが問題。
- ・実際にどう実行していくか、なかなか見えない。自治会をメインにしているが、現在40%ほど、60%は入っていない。
- ・昼間ではなく夜に実施し、話をしたり、相談を受けたりしている。

■飯塚市老人クラブ連合会

【現状】

- ・全国三大運動「健康・友愛・奉仕」の三つを掲げて活動している。健康はゲートボール、パタンク教室をしている。友愛は一人暮らしの方の見回り、奉仕活動については、老人の日などに活動したことを報告してもらっている。昨年から、1年間を通して活動したことを挙げてもらっている。
- ・老人会としては会員の状況が悩みで、平成10年以降、会員が減ってきている。
- ・会員減少を止めるためには増強運動をしないとイケない。会員増強運動は毎年やっているが効果がない。
- ・増強運動に力をいれたいが、そのためにはどうしたらよいか。会員が減少していることが、会員さんに伝わっていない現状がある。
- ・今年から地区の連合会で呼びかけ、年間3回に分けて下に届くように呼びかけ運動をしている。
- ・コロナでいろいろあったが、計画していたイベントはほぼ実施した。体力測定もしている。

■飯塚市全体として必要なこと（相談支援・参加支援・地域作りに向けた支援）

- ・情報発信

■筑豊子育てネットワーク「かてて」

【現状】

- ・ 子育て支援センターを2か所運営している。そのなかでさまざまな支援を行っている。行政とのつながりはある。就労支援センターとのつながりもあり、就労支援なども行っている。
- ・ 運営しているスタッフに、県外から飯塚に嫁いできて、知り合いがいなかったりして寂しい思いをした人が多く、同じような人たちへのシンパシーがあり、アンテナが鋭い。気になる親子を見守る姿勢ができていると思う。
- ・ 専門家に聞くほどのことではないけれども、スタッフと話すことで安心するということがある。そうしたところでは感謝されていると思う。飯塚市外からも利用者があり、子育て支援においては、役にたっているのではないかと感じている。

【課題】

- ・ 小学生が遊べる場所がない。センターは、幼稚園児までは遊ばせることはできるが、小学生以上は遊ばせられない。親は遊ばせるところがないので、センターにやってくる。その時に、紹介する場所がない。
- ・ 親子間の問題にどこまで入っていいのかということを感じている。多動が気になる子どもがいたとしても、母親がどうかしようという気持ちにならないと、どこにもつなげられない。専門家ではないので、判断が難しいし、踏み込んで聞いたほうがいいのが悩む。
- ・ センターにやってこれる人に対してはなんとかケアができるが、そうでない人たちに対してのアウトリーチが悩ましいところだ。
- ・ アウトリーチについていえば、男女共同参画推進ネットワークの方で「繋がりサポートカフェ事業」という交流センター（公民館）に出向いて、イベントと一緒に相談事業を行っていた。また、自治会長の協力で子育てサロンを開催することもできた。いろんな人に声をかけたら、自分たちも協力するということが多かった。そのように繋がりの中で支援ができている。
- ・ 子ども食堂をやりたいという声を受けて、実際に子ども食堂を開催した。その際、市から補助金を利用することができた。行政が、やりたいことを後押ししてくれる支援が増えるとありがたい。

【共生社会にむけての課題】

- ・ ファミサポなど、何かしたいって思ってる人はいると思うが、自己責任とか責任とかそういう風潮が踏み出すことを阻害してるという気はしている。
- ・ 自分ができるときだけやるのが大切ではないかと思う。ゴミ出しぐらいだったらできるとか、ちょっと自分が体調悪かったらやらないとか。無理してやると繋がらないから、自分が気持ちいいぐらいの関りかたでいいのではないか。1回やったらずっと続けなければいけないと思ってしまうが、そこまでではできませんとか、はっきりとNOと言えることが大切かなと思う。

【連携について】

- ・ 相談を受ける側、支える側も、困ったときは相談できる相手がいるとよい。

■いづか男女共同参画推進ネットワーク

【現状】

- ・ 環境福祉部会では、地域福祉を学んでいるところだ。地域に入り、地域のことをしっかり知らなければいけないと考えている。ネットワーク団体なので、いろんな意見、考えが聞けると思っている。
- ・ 小学生の遊び場ということについていうと、当ネットワークでイベントを開く場合、託児所を設けるが、その場合小学生をどうするかということが問題となる。

【共生社会にむけての課題】

- ・ 地域の中で手助けを行っているとき、専門の人間でないものがどのように係ればよいか分からなくなる時がある。法律がある以上それを守る必要があり、どこまで手助けをするべきか迷うことがある。

■飯塚市・嘉麻市・桂川町障がい者基幹相談支援センター

【現状】

- ・ 現状としては、職員は限界にきているのではないかと思う。
- ・ 今後は、障がいを持っていない人に対して、障がい者のことをどうやって知ってもらうかが重要だと考えている。生活がどうなっているのか、共生社会のなかで一緒に暮らすためにはなにが必要なのか考える必要がある。
- ・ 障がいの有無での区別というところが大きいのではないか。異質なものだと感じる事態をつくってしまう。特に、小中学校のクラスの分け方がそうだ。ここは変えていく必要があると思っている。
- ・ 子どもの障がいについて気になっているけれども相談に行きたくても、親類の繋がりの中で相談に行けないという事例がよくある。そうしたことをなくしていくためにも、意識を変えていく必要がある。障がい者の支援も必要であるが、一方で、地域側に対しては障がい者への理解、意識啓発が必要ではないかと思う。
- ・ 災害の時にどうするかということが緊急の問題だと思っている。発達障がい、自閉症の人が避難所に行くかということ、そうはならない。
- ・ 8050 問題についても、自治会長、民生委員は地域の情報を把握していると思うので、そうした人たちと連携して、事前に情報を把握し、アプローチをしていきたいと考えている。何かが起こる前に、なにかできる体制を整えたいと考えている。

【課題】

- ・ 虐待について、市役所内で同じようなことをバラバラにやっている。そのなかで、例えば高齢者の事業を、障がいのほうに使えないのかと疑問に持つことはたくさんある。
- ・ 社協の事業は固定化しないはず。前年ベースで事業をやり続けると、固定化してしまう。この点については、もう少し柔軟に考えてほしい。
- ・ ニーズは高いが、制度がなっていないような隙間のサービスをうみ出せるのは社協だと考えている。
- ・ 障がい者が働いたり、通院したりするうえで、交通アクセスの悪さは、課題ではないかと思う。市バス、福祉バスもすこし柔軟に運用できないだろうかと思う。

【共生社会にむけての課題】

- ・ サービスでやれるところは限られている。サービスでカバーできないところは諦めてということでは成り立たない。障がい者でも、さまざまなことをしたい。そうしたことをお互い理解し、協力しながらやっていくことが必要。
- ・ 総合相談窓口が必要ではないか。相談の内容は、そこだけで終わるものは少ない。さまざまな機関が関わる必要がある。相談に来た人を、各機関に回していくのではなく、関係する人たちが一度に集まるということが必要ではないかと思う。

■ぼれぼれの会（障がいを考える会）

【現状】

- ・ 現在は活動していない。20年前にこの会を立ち上げた。同じ悩みをもつ人が集まり、互いに話せるようにした。現在では、家族への支援が大切だと思うようになった。当事者支援が足りていないのではないかと感じている。
- ・ 障がい者福祉ということ言えば、子どもでも障がいがあれば、子どもに分類されず障がい者として位置づけられる。障がい児が大人になって、スポーツするといった場合、障がい者スポーツの枠に入れられる。障がい者の枠のなかから抜けられない。生涯学習課の事業のなかには、障がいのある人たちのスポーツや学習支援ははいっていない。学習のスピードなど幅のある人たちであり、場所とか時間が工夫されていないところが、本人がジレンマを感じる場所となっている。それが結果的に本人の障がいを悪化させている。本来はいろんなことができる人たちであるはずなのに、場所とか時間が確保されていない。認められていないから、物が言えなくなっている。そうした状況をなんとかしなければいけないと考えている。
- ・ 障がいがあるからいけないということは全くない。障がいがあっても、本人がいくらやりたいといっても、周りの人たちからの理解がないとなにもできなくなる。
- ・ 障がいを持つ子どもを育てた経験は、大切な物だ。そうした経験を伝えていければと思っている。これは子育て支援につながる。
- ・ さまざまな事業が重層的にならないといけないと思う。すべてつながっていると思う。

【共生社会にむけての課題】

- ・ 世代や属性を超えて交流できる居場所が必要ではないかと思う。関係性ができてないと、頼み事、お願いはできない。関係性を作れる場があったほうが良いと思う。
- ・ 障がい者はいろんなことができるが、助けられる存在だとされると力をなくす。それは、どんな人にも当てはまる。助ける・助けられるという上下関係で考えるのではなく、横の関係をつくっていく。そうした関係を多く作っていくことが必要ではないか。

■NPO 法人いづか障害児者団体協議会

調査日時：9月7日（水） 16時30分～17時30分

調査方法：対面式のヒアリング

【現状】

- ・ コロナの影響により集まることができないということが大きい。
- ・ サンアビリティーズ飯塚が拠点で、指定管理しているが、利用者増のための周知、広報ができていない。
- ・ 障がいのことを知ってもらうことが大切なのだが、そこが一番難しい。
- ・ 活動の輪を広げるといっているところでは、ボランティアの好意でしていただいている部分、ボランティアが全部無料で手弁当でっていう形ですっとしてきてることが、依然として残っている。そうした行為に甘えることが、限界にきている。そのあたりのことも考える必要がある。
- ・ 障がい者に関わる人って増えてきていると感じる。いろんな団体がやりたいことを行っているように思う。しかし、イベントを行うと人が同じで、それぞれが互いのイベントに参加している状況となっている。自分たちが疲弊している。関心のないひとたちをいかに巻き込めるかが課題だと感じている。
- ・ コロナは逆説的に、自分たちが行っていることを反省することになった。国が考えている参加支援、相談支援、地域作りに向けた支援というのは妥当だと思う。そういうのも、各団体には得意分野がそれぞれにあって、ばらけていって、やってる方も負担がない、参加される方も、それ面白そうだなんて呼び掛けができてそこに参加できる、そのように役割を分担する形で、効果的に行ったほうがよい。すべての団体がすべての支援を行う必要はないと思う。
- ・ これまで似通った形の活動が多く、マンパワーが偏り、効果があまりないということが多いような気がしている。われわれの力が発揮できる活動というのは何かを、探していきたい。

【支援について】

- ・ 相談支援など、サポートする事業所とかがとても増えていて、専門的な支援もそうした事業所がやれてしまう。私達はどっちかいうと相談を受けて、繋ぐということになるのではないかと思っている。飯塚市にはたくさんの専門家がいるので、そうしたところに繋がっていない人がいたら、適切などころにつなぐということが必要だと思う。そのために、スポーツ等のイベントを頑張っていく必要がある。アウトリーチができればよいと考えている。
- ・ 協議会が全体をコーディネートすることは、資源的に難しい。コーディネートを行うのは、飯塚市であったり、機関支援センターだと考える。

【地域共生社会をつくるためには】

- ・ 障がいもひとつの個性だと認めること、そうした状況をいかに作っていくかということだと思う。知らないことが差別につながる。教育が大事だが、そこが一番難しい。
- ・ 先ほどいったようにこれまでは同じようなメンバーで固まっていた。外からの参加に繋がっていないという反省はある。外とどのようにつないでいくかということが大事だと感じる。ボランティアの参加も大事だと思う。障がい者に接すると理解できることはあるが、接しないと分からない。この点は、障がい者の就労ということにおいても同じだ。

【障がい者福祉に関して】

- ・ 逆説的な話だが、障がい者を取り巻く状況が良くなってしまって、障がい者が外に出て行かなくてよくなっている状況がある。障がい者と接する機会が減っているのではないか。
- ・ 福祉サービスが充実しており、親の都合で子どものサービスを選択してしまう。それが本当にその子どもにあっていいのかどうか、考えてしまう。子どもの学ぶ力を大人が奪っているのではないかと思う。障がいがあっても子どもたちの声を聞くべきではないか。

■中央福岡ヤクルト販売（株）東筑支社

調査日時：9月8日（木） 14時00分～14時15分

調査方法：電話によるヒアリング

【行政との連携について】

- ・ ヤクルトは大宰府市で、災害時に本社の会議室を避難所として開放する等の地域協定を結んでいる。飯塚でも、そのような協定を結ぶことができると考えている。
- ・ 大きな方向性としては、その地域特性に応じた形で支援できればと考えている。そうした場合に、行政からのアプローチや情報の提供が不可欠だと考える。
- ・ 会社として、会社の理念である健康経営、また、EGS や SDGs を推進しているので、そうしたものにあった取り組みを進めたいと考えている。

■NPO 法人飯塚市青少年健全育成会連絡協議会

調査日時：9月8日（木） 16時15分～16時45分

調査方法：電話によるヒアリング

- ・ 児童クラブの運営を行っている。児童数も増えており、共働きが多くなっている感じがする。
- ・ 児童には大きな変化はないと思う。
- ・ 地域の人からは、サポート委員というかたちで協力を得ている。
- ・ 管轄が学校教育課となっており、学校との連携が密となっている。学校との情報交換はできている。これは、われわれの強みとなっている。
- ・ 親が迎えにくるので、親とのコミュニケーションがある。そうしたところでは、学校よりも児童の情報を持っているといえるかもしれない。
- ・ そのため、虐待等の問題については、早期に対応したいと考えている。
- ・ 今後は地域との関係を強めていきたいと考えている。